

第1章 貝原益軒の生涯

『養生訓』（1713）は江戸時代を代表する本草学者である貝原益軒（[寛永7]1630-[正徳4]1714）の代表作のひとつである。しかも益軒の晩年に書かれたものである。ここでは単に生涯を時系列に辿るというよりは、『養生訓』の執筆に至るまでの経緯を重視するため、著作背景として捉えた。なお、本論文の最後に「貝原益軒に関する年表」を付した。

第1節 著作背景

益軒が『養生訓』をまとめるにあたり重要な点が2点あると考えている。第1は彼がどのように知識を得たのか。第2にいつ頃、調査や旅でどのような場所を訪れていたのかということだ。そして何故そのような旅ができたのかということも重要な要因である。

益軒が著作活動を開始するまでの彼の活動を端的にまとめた額田年『歴史からみた養生訓』（1963）では次のように述べている。

一六三〇年（寛永七年）に九州黒田侯の侍医貝原利貞の四男として、福岡に呱呱の声をあげたのでした。九歳の時から兄の存齋について書を読み詩歌を学びまた医書に通じ、その後三十八歳の時に京都に留学して、松永尺五、木下順庵、山崎闇齋などについて儒学を学び、三十五歳の時には黒田侯に藩医として仕え、儒学も教えたのでした（額田 13・14）。

島本昌一「益軒の『止戈編』について—益軒学の出発点」（2010）では「益軒の経歴」として次のように述べている。

益軒の家系と幼年期の学習をみて興味深いのは、彼の家系が伝統的な武勇の家柄でも儒家のそれでもなかったということである（島本 92）。

益軒の生涯でよく言及されることがある。澤田節子「貝原益軒の『養生訓』にみる健康術—セルフケアをめぐる—」（2011）では「貝原益軒の生涯と功績」でも次のように述べている。

浪人時代に江戸で父親と同居しながら医学を学んでいるが、医学より儒学に興味を持ち勉学に励んだ。その後、彼は再度黒田藩に48年間仕えた。彼は、儒学、自然科学を兼修し、文化人と藩士という2つの面をもち、40歳くらいから教科書などの編集をし、『黒田家譜』を完成している。職を退いた70歳頃から多くの書物を刊行している。私生活では、39歳の時、22歳年下の東軒と結婚し、夫婦で諸国を見聞していた記録が残っている（澤田 88）。

この中で「浪人時代に江戸で父親と同居しながら」とあるが、益軒がこの時期、江戸でどのような見聞等をしていたのかがよくわからないのだ。益軒は1644年～1647年の間は江戸に滞在し、1648年以降も江戸を訪れ、時には日光まで足を延ばしていた。また、1650年から1656年の間は益軒の不遇の時代でもあり、いわゆる福岡藩の役職を免職となり、浪人時代があった。江戸滞在中には林鷲峰（羅山）（1583-1657）に会う機会があったことは特筆すべきことだ。（本文中では藩名は「福岡藩」で統一するが、引用等では一部「黒田藩」とある）林羅山は幕府に重用され、1656年にはわずか11歳で4代将軍となった徳川家綱（1641～1680）に『大学』を講義するほどの人物である。当時の江戸は浅草を中心に奈良茶飯が流行していた時期でもある。「第4章 奈良茶」で取り上げることになるが、益軒が江戸の奈良茶飯をどの程度把握していたのかが不明なのである。次に注目しておきたことは「文化人と藩士」という側面である。

伊藤友信「現代語訳の序にかえて—新しい益軒像と『慎思録』—」（1996）では次のような要約もある。

…益軒の生涯は、三代将軍家光から七代将軍家継の時代であるから幕藩体制は強固で少しの揺ぎもない時代であった。その時代に九州の黒田藩の儒者という立場にありながらも益軒の視点には常に新時代を予見するよう何かが芽生えていたのではなかろうか。もちろんそうした学問的姿勢が見えはじめたのは晩年である。詳しくは益軒七十一歳（数え年）、黒田藩を致官（退官）してからのことである（伊藤 4）。

益軒は福岡藩・藩主黒田忠之（1602-1654）に仕えた貝原孫太夫利貞（晩年は寛齋）の子として生まれた。孫太夫利貞は藩主の祐筆役であったようだ。黒田忠之は初代藩主・黒田長政（1568-1623）と継室・栄姫（徳川家康養女）の嫡男として生まれている。黒田忠之の藩政は重鎮を軽んじたことから1633年にはお家騒動が勃発して、その後、黒田騒動として汚点を残した藩主であった。

益軒は1635年に母を亡くし、さらに1642年に継母も亡くしている。1643年に父、孫太夫利貞が浪人となり、経済的にも厳しい状態となる。松田道雄「貝原益軒の儒学」（1969）によれば益軒は読書家であった。

読書の好きな益軒は、八歳のころには近所の知人の家から『平家物語』『保元物語』『平治物語』『太平記』などを借りてむさぼり読んだ。彼がはじめて四書を読むようになったのは、十三歳であった（松田 12）。

四書とは『論語』『大学』『中庸』『孟子』の儒学の4つの書物を総称したものである。

益軒自身も若い頃の読書について『慎思録』（1714）で次のように記している。

余十四歳より頗る聖学の尚ぶべきを知りて経伝を誦読することを好む。幼より老に至りて晨昏にも廢てず。妄意に自得せんと欲するの志あり（貝原 i 173）。

私は十四、五歳の頃から大いに経書のすばらしさを知って、経書を誦読（声を出して読む）したものである。幼年時代から老年の今日に至るまで朝夕も怠けることなく実行した。そしてむやみに自得しようと努めたものである（貝原 i/伊藤 35）

伊藤友信「現代語訳の序にかえて一新しい益軒像と『慎思録』一」（1996）では益軒の蔵書について次のように述べている。

かれの蔵書（読書）目録には儒書を別として、右の文学書の他に『太平記』（熟覧として）『保元物語』『徒然草』『伊勢物語』『古今和歌集』など多くの文学書が記録されている。また『医学正伝』『名医方考』『万病回春』などの医書も記されている。おそらく当時の儒者の蔵書記録にはこれほど多くの文学書・医書をみることはできないであろう（伊藤 7）。

また、父からの影響も見逃せないものがある。

寛齋は以前から医書を読み、浪人時代に博多の町中に住んだのも、町人の子に筆算を教えるあいまに、薬草などを売るためだったようである。少年益軒に父は、『医学正伝』『医方選要』『万病回春』などを読ませていたし、薬についての知識も与えていた（松田 12）。

益軒に影響を与えた身近な人物として 8 歳年上の兄、貝原存齋（1622-1696）がいる。吉田光邦『江戸の科学者』（2021）でも次のように述べている。

益軒は正式に学問を学ぶチャンスにめぐまれなかった。しかし年長の兄から漢字や漢詩を教えられた（吉田 33）。

この兄は京都で 5 年間学び、その当時の新しい学問として朱子学を学び帰郷した。朱子学は南宋の儒学者・朱熹（1130-1200）が打ち立てた学問のひとつで、「性即理」「君臣父子の別」を重要視するもので、前者は人間の「理」と「情」のバランスを重視し、後者は封建社会を支えるのに都合のよい考え方もあり、江戸時代には重用された。

もともと、一つの社会が統一した秩序を維持するためには、支配する側の力がひろく被支配層におよばねばならぬ。力の経済からいえば、支配する力が露出するよりも、支配

される層から、押しつけられる秩序をみずからの秩序として、自発的に維持してくれる方が、効率がよい（松田 21）。

秩序を形成するための考え方がこの時代にあっていたということだ。

…修身・齋家・治国・平天下と、個人から天下までを一つのモラルでつらぬく朱子学ほど恰好な思想はなかった。支配者となった武士がこの思想を採用したのは当然であった（松田 21）。

これまで支配層は儒教を僧から習っていたが、儒学者の登用は林羅山から始まった。こうした時代の中、朱子学の影響を受けた兄からの影響はその後の益軒が儒学者の一面を持ち合わせる大きな要因となった。

益軒は1648年、19歳で福岡藩に出仕するも、すぐに免職されてしまう。

黒田忠之は黒田騒動の中心人物だけあって、益軒を評価するだけの器をもたず、慶安三年に益軒は免職されて七年の浪人生活を送らねばならなくなったが、その間に益軒は学問の蓄積をする機会もあった。そのころ日本にあまり多く渡来していなかった朱子（朱熹、南宋の儒者）の『近思録』を入手して、それに没頭したのは二十一歳の時だった。それから十七年たって著した『近思録備考』は、貞享三年（一六八六）、長崎に来た清の学者朱竹垞の絶讃をうけ、その人によって筆写されて中国にもってかえられる（松田 12）。

井上忠『貝原益軒』（1963）においても益軒が免職になった理由は不明であるとしている。

…どうした理由によるものか忠之の叱りをうけ閉居十五日、お目通りかなわぬこと四カ月の処罰をうけた。翌年八月再び忠之の怒りにふれて遂に浪人の身となるに至った。益軒が温厚な人物で、つづく藩主光之・綱政に愛されている藩のために尽力し功績をあげているところよりしても、むしろ問題は忠之の性格にあったと思われる（井上 20）。

しかし、益軒はこの浪人の時期も無駄に過ごしてはいなかったようだ。

読書記録として『玩古目録』には儒書のみならず種々の書名を見ることができるが、すでに述べた文学書の多くも記載されている。寛文五年（三十六歳）以前は年度別ではなく一括して記録してあるが、そこに意外な書物を発見することができる。『王陽明全集』、『王龍溪全集』、『王陽明則言』、『伝習録』などの陽明学に関する書物と『神社考』などの神道にかかわる書籍である。朱子学者であった益軒の学説の中に古学的、陽明学的、

老荘的な思想が散見されるのもこうした幅広い学問の実践からであったといえよう。とすれば、その修めた時期は二十代の浪人期であったと考えても大きな誤りはないであろう（伊藤 10）

『玩古目録』は九州大学九州文化史研究所内九州史料刊行会編『延宝七年日記・日記五号 日記六号・玩古目録』（益軒資料二）（1956）に収録されている。それを見れば益軒がどのような本を読んでいたかがわかる。その冒頭にあげられているのは「大學・論語・孟子・中庸・周易・尚書・詩経春秋・禮記・小學并本註・孝経・近思録・四書集注・孝経大義・少學集説数編・近思録集解同・小學句讀同。」（九州大学 1）である。『玩古目録』の研究はすでに井上忠『貝原益軒』（1963）の内「1 『玩古目録』について」で明らかにされている。

統計の末尾に現れたように、八十歳までの間に総計千百十三部、うちわけは漢書五百六十四部、和書五百四十九部で、総部数中に占める比率は大体漢書五〇%、和書五〇%になる。読み方についても特殊な場合は、「粗見」「抄録」「朱点」「点朱要語」などと註記し、また簡単な解説や批判が加えられる場合もある。

部門わけをみると経書およびその註釈書について朱子学および同学徒の著述が多く、朱子学徒をもって自任したその面目に背かない（井上 185-186）。

井上が目していることは、「本草医学書が五十二部」（井上 186）、「和書においてはまず和歌およびその注釈書が意外に多い」（井上 187）、「史書の内わけは軍記物・家譜類が特に多い」（井上 187）と、その広範囲にわたっていることを紹介している。また、「後年になるにつれて和書の読書量ふえる」（井上 187）とういことにも注目している。なお、井上は見開きで1113部を「益軒の読書傾向一覧表」（井上 186-187の間）として分類し、まとめている。

益軒は『慎思録』（1714）の中で蔵書について次のように述べている。

学者の家は貧困といえども、書を蔵するの多き者は、以て清福となすべきなり。（貝原 i 213）

学問をする者の家は貧困であっても、蔵書の多い人びとは清らかな幸福に満たされているといってもよからう（貝原 i/伊藤 95）

黒田光之（1628-1707）は1654年に黒田忠之の死後に伴い後を継ぐと、益軒にも大きな影響が訪れた。黒田光之は父・忠之とは異なり、文化面にも素養があり、その観点からも益軒には追い風となったと思われる。

益軒の再出仕の時の役名は記録にのこっていないが、御医者ということであったらし

い。それも実は口実で、この優秀な篤学の青年に奨学資金をあたえるのが目的であったようだ。明暦三年から寛文四年帰藩の命令がでるまで七年間、彼は藩の費用で京都で勉強することができるようになった。二十八歳の青年をむかえた京都は儒学研究のメッカであった（松田 13）。

「明暦三年から寛文四年」とは1657年から1664年にかけてのことだ。京都遊学については吉田光邦『江戸の科学者』（2021）で次のように述べている。

京都に出た彼は山崎闇斎の講義を聞き木下順庵、向井元升など友人になったが、なかでも元升とは特に親しかった（吉田 34）。

益軒は浪人時代に読書に耽り、京都遊学の時には交友関係を広め、最新の儒学者として朱子学の研鑽を深めた。益軒の浪人時代の過ごし方としてもうひとつ注目しておきたいことは長崎への旅がある。「益軒先生傳」（1979）には次のような説明がある。

此時二たび長崎に遊びたる事情に就ては、書など見に行き久々滞居候と自ら述べたる外、その消息は仔細に知ることを得ざるも、當時は鎖國の令厳びしく行はれて、長崎は唯一の外國貿易港となり、明末の支那人の多く来航するあり、大陸の文物と接觸するの便利に富み、圖書の舶載せらるゝものも多かりしを以て、先生の往いて遊びたるは、是れ讀書講學の趣意に出でたるには相違なきも、此頃は先生已に醫と爲つて身を立つるの意あり、殊に長崎の醫を學ぶに適當したる地なしを思ふときは、その讀書講學の趣意なるものは蓋し主として此邊の事情より起れり（益軒先生傳 23）。

当時は国策として鎖国政策をとっていたが、明はこれには該当しないため、明からの最新の学問書に触れるには長崎はまさにうってつけの場所であったとも言える。

1671年に益軒は藩命により、『黒田家譜』の編纂の命を受けた。1678年には益軒は十二巻に及ぶ『黒田家譜』を藩主・黒田光之に献上した。藩士としての益軒の仕事である。すなわち、益軒は1671年に『黒田家譜』の編纂の命を受けるまでは比較的自由に朱子学等を学ぶ機会が与えられていたのだ。

益軒の著作背景としてその生涯を見た時、大別すると2つの時期に分けることができよう。第1はこどもの頃の読書癖、江戸での浪人時代、長崎への旅、その後京都での遊学。第2は藩命による『黒田家譜』の編纂以後、すなわち、彼が本格的現地調査を目的にした旅を開始したことだ。現代で言うフィールドワークである。益軒がこの藩士としてのフィールドワークの傍ら、自らの考えで各地を訪れたことは後年の大きな特徴となる。

第2節 旅と紀行文

日本の旅文化や紀行文は早くから育っているが、それには治安が比較的良かったという前提があったと考えてよいだろう（桜井 223-224）。鎌倉に幕府が開かれたこともあり、京都と鎌倉の間で往来がかなりあった。そのこともあり、中世3大紀行文とも称される『海道記』（1223）、『東関紀行』（1242）、阿仏尼『十六夜日記』（1279）等々の紀行見聞記がある。『十六夜日記』は正確には旅日記である（今野 2）。

江戸時代に入ると社会が安定すると人の移動も活発に行われるようになった。特に益軒の生きた時代では伊勢参りが流行となったことは旅の方向性が変わったことの一面を表している。これまでは京都から江戸、あるいは他の地域から江戸へという江戸への旅が中心であったものが、江戸から伊勢神宮、また温泉地への旅といったいわゆる地方への旅が行われるようになったことだ。旅の在り方も時代により変化した。これに伴い紀行文の在り方も変化してきた。このことについて板坂耀子『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち』（2011）では次のように述べている。

時代にもなまって変化した旅と旅人を描き出すために、江戸時代の紀行作家と読者たちが、選びとり作り上げていった、新しい紀行の基盤となり中核となるのが、次の三要素であることを示したい。

- ① 旅先の土地や旅の実態、見聞した事物とそれに関する知識、また旅によって変化する自己の内面を、できるだけ多く読者に伝えようとする姿勢
 - ② 感傷的にならず、積極的に旅の困難に対処し、時には笑い飛ばす主人公の造型
 - ③ 自己の内面も外部も風景も、常套句や共通の認識、既成の様式によりかからず、具体的で的確な語句を用いて確実に伝えようとする工夫
- これらが江戸時代の紀行にそれまでなかった大きな魅力を与えている（板坂 d vi）。

しかし、益軒は自己の内面を紀行文に反映させようとはせず、できるだけ事物に対して客観的に、そして自分の見聞したものを正確に描写しようとしていることが大きな特徴だ。

八隅蘆菴『旅行用心集』（1810）が世に出た頃の旅事情については、桜井正信「現代に生きる用心集の心—解説にかえて—」（1993）で次のように述べている。

蘆菴『旅行用心集』の出された文化七年（一八一〇）ころは、江戸時代の末期に当たる。日本の旅行文化の上からは、次第に女性の遠出を認めるようになってきたときでもある。

寛政十二年（一八〇〇）に、幕府は子女の富士登山を許している。これより前の宝永二年（一七〇五）には、慶安三年以来盛んになった伊勢参りはピークに達し、春から初夏にかけて、伊勢への参宮は三百万を越えたと伝えられている。

このように蘆菴の生きた時期は日本ではじめての大衆旅行の時代を迎えていた。また

蘆菴が用心集を出す前に、旅の達人といわれた十辺舎一九が享和二年（一八〇二）に、『東海道五十三次』を出版して、巷で人気を呼んでいる。武家出身の一九は、旅の姿勢を語り、蘆菴が道者で旅を説くのと違ったウィットで伝えている。

旅が大衆化すると、道中や旅籠の乱れがともなうが、文化一年（一八〇四）には、浪花講という旅館組合が創設されて、旅人が安心して宿泊できることを保証した。今日という協定旅館ともいうものであった（桜井 225-226）

八隅蘆菴『旅行用心集』（1810）の出版はこの頃には旅が大衆化し、現代で言う旅のガイドブック的なものが必要になったということだろう。その要因のひとつとして伊勢参りがある。深井甚三『江戸の旅人たち』（1997）では1705年の伊勢参りについて次のように指摘している。

宝永二年（一七〇五）に、全国から伊勢へ向かって膨大な人々が、領主の許可なども受けずに抜参りをした御蔭参りが発生した。御蔭参りのきっかけとなったのは、子供たちの抜参りであったが、彼らの抜参りを契機に、上方の奉公人などの子供やまた女性たちがいっせいに抜参りに出かけたこの動きが全国へ波及して御蔭参りになった…（深井 88-89）。

柴田純『江戸のパスポート―旅の不安はどう解消されたか』（2016）によれば、庶民の旅の普及には自立した農民の増加、城下町の成立、五街道の整備、旅籠などの整備、金銀銭の铸造、さらに往来手形の多様化などがある（柴田 16-19）。伊勢参りがピークを迎えた時期は益軒があちこち旅をしていた時期とも重複するのだ。また、今野信雄『江戸の旅』（1986）によれば、伊勢神宮では吉凶を占い、農耕に影響を与えていた伊勢暦があり、これを求めることも大きな人気があった。現在最古のものは1660年である（今野 73）。今野はさらに伊勢神宮への参詣者について1718年に伊勢山田奉行が徳川吉宗に、正月元旦から4月15日までに427000人であったことが報告されたこと、推測では1年間で60万人程度の参詣者がいるのではないかと述べている（今野 77-79）。

第3節 貝原益軒の旅と紀行文

益軒は役職として旅を伴うことが多かったが、それ以外には彼自身のための旅もそこから派生して生まれている。また単に旅をしていただけでなく、その旅の記録を残している。益軒の場合にはその記録が「〇〇記」「〇〇巡覧記」などと表現されている。

藩士としての仕事が一段落すると、益軒の旅は本格化する。

『黒田家譜』が完成すると益軒は、こんどは自分の発意で筑前の地誌をつくりはじめ

る。これから藩主の同意を得て、巡郡の命をだしてもらって藩内の各地をみてまわることになる。これは十五年かかって元禄十六年七十三歳でできあがる。もともと益軒は旅行を愛した。福岡から江戸まで前後十二回行き、陸路だけでなく海路にもよった。最終の江戸行きの元禄五年の時は六十二歳であった。その行路は、海路福岡から播州の室津にいたって上陸し、書写山に上り、姫路にあそび、大坂から大和路を経て伊勢に詣で、東海道を下って、興津から甲州の身延山に上り、駿河・江ノ島・鎌倉を通り江戸に達している。その日程は三十日であった（松田 16）。

益軒は江戸時代を代表する本草学者であり、旅を多くした学者の一面も持ち合わせている。単に書物だけを読んでいた学者ではなく、現地への調査を行い、頻繁に旅をしていた学者でもある。井上忠『貝原益軒』（1963）は次のように述べている。

恐らく彼ほど多くの旅行をなし得た、しかも好んだ学者はあまり多くないといえよう。参観供養としてまた藩命により江戸へ十二度、京都へ二十四度、長崎へ五度行ったが、殆ど拝借金なしですましたと語っている。またその往復途上を利用しては諸所を遊歴した。それを可能ならしめるほどの健康体だったと考えねばならぬ（井上 106-107）。

益軒の紀行文における記述態度について次のような指摘がある。

紀行記においても科学的な眼光が随所に及び、各地に伝わる古歌伝説に対しても非合理的なものには実証により飽くまでもその嘘りをあばくに容赦がない（井上 125）。

また、史跡等への関心も高い。

…考古学的遺跡に多大な関心をよせ、余裕がある場合には一応の実地調査をしていることが注目される（井上 126）。

当然のことながら、井上は「紀行を書くに際しては他の地理・紀行書を参考にしたであろうことは容易に予想し得る」（井上 127）とも述べている。益軒が書物だけに頼らず、実体験を通したものを反映させている点でも、益軒の紀行文の信頼性の高さが高い評価を受けているのだ。

益軒の旅好きについては民俗学者の宮本常一「探検・紀行・地誌 西國篇 序」（1969）で次のように述べている。

…士官の余暇をぬすんで旅をつづけた貝原益軒は、旅学問の世界をひらいた最初の人ではないかと思う。益軒は福岡藩の医者にして儒者、薬学をまなび朱子学をまなび、陽明

学をまなび、『大和本草』や『筑前続風土記』のような実学の書もかいており、一般民衆にもっとも近い学者であった。その益軒は江戸への上下の途中諸所を巡遊して多くの紀行文を物している（宮本 3）。

さらに宮本は次のようにも述べている。

益軒の紀行文は十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』などともに旅行するものにとっては一つの経典として読まれたものらしい。『大和巡日記』がそのことを示してくれる（宮本 3）。

『大和巡日記』とは安田相郎『大和巡日記』（1838）のことである。

西村隆夫『旅する益軒『西北紀行』 山城・丹波・丹後・若狭・近江を巡る』（1997）の「序文」で西村は次のように述べている。

貝原益軒は天性の旅行好きであった。井上忠氏によれば、その旅行回数は江戸へ十二度京都へ二十四度、長崎へは五度と、しかもこの間諸所を遊歴して自然美への愛好心を深め、歴史地理、博物などについての実証的な見聞を広めて、『知行併進論』を実践して見せたといわれている。

数多い紀行文のうち、西日本についての作品をあげてみると、元禄二年（一六八九）春、京都を立って丹波・若狭・近江の各国郡を巡った『西北紀行』、河内・和泉・紀伊・大和の国々を歩いた『南遊紀行』、有馬・東播磨を巡った『摂津巡覧』、元禄五年（一六九二）に再度大和を巡った『和州巡覧記』などがみられる（西村隆夫 1）。

その内容についても次のように指摘している。

思うに益軒は天性の旅行好きに加え、独特な表現の中に新しい時代の息吹を感じさせるまず表現が平明にして情緒豊かな和文でもって書かれ、国文学に対する教養の深さが感じられる。特に情緒本位で神秘的な自然美や産業、地理などを記した点で、益軒をもって嚆矢とされる。従って、紀行文は産業、地理についての写実的表現と他面自然美や社寺旧跡と言った名所案内記的な要素の強い、後の名所図会に似通った記述がみられる（西村隆夫 5）。

なお、西村は益軒の紀行文の特色を次の 5 点としてまとめた。

- ① 平明簡潔な表現
- ② 情緒豊かな和文体

- ③ 文学的な教養の深さ（名所旧跡）
- ④ 清新な写実
- ⑤ 地方独特の自然美・産業・地理の実証的な叙述（西村隆夫 194）

益軒の文章は飾り立てた表現を避けているために、彼の紀行文は旅行案内書として信頼が置けるというものだ。このことから第4章で取り扱う「奈良茶」、第5章で取り扱う「温泉」「汲み湯」における益軒の表現についても注意すべきものがある。

益軒自身も旅については例えば、『壬申紀行』に「わかき時より年毎に旅の空にうかれ出て東往西還の客となりてやむことなき…。」（貝原／板坂 b 6）というように記載していることや、人生の楽しみを説いた『楽訓』（1710）に「旅」（益軒 g 616）が取り上げられていることなどからわかる。井上忠『貝原益軒』（1963）では益軒の旅について次のように述べている。

…朱子学の知識を重んじ、知り尽くして後に行なうという「知先行後説」に反対し、「知行併進論」すなわち両者を併行に進めてゆくことの必要を旅行に例をとって力説した。旅路のことを知り尽すまで出発を待っていては旅行できなくなる、判ったところまで行ってそれから先はさらに人に尋ねてゆけば捗るというのだが、旅行によって開かれた具体的な知識、さらに物を見る眼は多大だったはずである（井上 107）。

益軒は、福岡藩の役人の公務で江戸や京都を往復する傍らに、足を延ばし、回り道をするその旅の記録を多くの紀行文として残した。益軒の紀行文については溝口周道「近世の観光に与えた貝原益軒の紀行文の特徴」（2002）による研究がある（溝口 371-374）。溝口は先行研究を踏まえ、紀行文に記された旅は、『豊国紀行』『予諸国を多く遊観せしが』、『諸州めぐり』に『かねてより丹後若狭近江に遊観の志あり。』などと記されているように『遊観』すなわち『観光』の旅であった」とまとめている（溝口 371）。益軒は確かに蘭方医学以前の漢方医学の知識を中心にし、また旅から得た知見を活用してまとめた『大和本草』『養生訓』でも反映させている。

江戸時代の儒学者益軒の『養生訓』は、益軒がその死の前々年83歳の時に書き、その翌年には出版され世に流布したものであって、世人後生のためを思って著した益軒の遺言ともいべき書である。『養生訓』は単なる養生の技術や知識を述べたものではなく、そこで説かれているのは永遠の命を生きる人間の知恵である。理性的な観念や原理をふりかざしたようなものではなく、益軒自身で蘭方医学以前の漢方医学の知識を十分に生かし、実際に試みて効ありと認めたものはこれを記したものである。一方、益軒は旅を多くした学者の一面も持ち合わせている。単なる書物だけを読んでいた学者ではなく、日常の自己の経験を踏まえた学者でもある。益軒の旅は年表（楊 b 109-110）から見てもあきらかだ。特に、温泉地や大和への訪問は注目に値する。

板坂耀子『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち』（2011）では益軒の紀行文について次のよ

うに述べている。

その彼が紀行を多く記したことは、今ではあまり知られていない。奇しくも彼は芭蕉とほぼ同時期にこれらの紀行を落としている。その点数も最も芭蕉よりはるかに多く、また芭蕉紀行が生前に出版されなかったのに対し、益軒の紀行類は全国各地に多数現存する板本からも明らかなように、京都の書肆柳枝軒から次々に出版されて広く読まれ、幕末まで何度も再版された。後の時代の紀行にも、芭蕉の作品よりずっと頻繁に引用され、（板坂 d 76）。

益軒は江戸時代を代表する本草学者であると同時に、旅を多くした学者の一面も持ち合わせている。単に書物だけを読んでいた学者ではなく、フィールドワークを行っていた学者でもある。

『養生訓』の中で旅での経験が生かされたと思われるのは温泉地や大和の訪問である。温泉に関しては、益軒の年譜等（益軒会編 a 12-21）によれば、『養生訓』を完成させるまでに少なくとも、九州の杖立温泉（益軒会編 a 21）、別府温泉（福岡市博物館・特別展示解説）と有馬温泉（益軒会編 a 12）等に出掛けているのである。

益軒の旅に注目した研究には、紀行文、観光の観点から現在焦点が当てられている。板坂耀子は『壬申紀行』の解説で「やはり、近世紀行文文学史について述べる時、貝原益軒の存在を欠かすわけにはゆかないだろう」（板坂 b 431）と指摘しているが、さらに板坂耀子『江戸の旅と文学』（1993）の中では次のように述べている。

…近世の紀行文文学史が綴られる時、常にとりあげられて、一定の評価をうける近世紀行は、貝原益軒の諸作、菅江真澄の諸作、橘南谿『東西遊記』、古河古松軒『東西遊雑記』、本居宣長、大田南畝の紀行、松浦武四郎の蝦夷紀行などである。これらの作品がやはり、近世紀行をかたちづくる代表作とってよい（板坂 c 7）。

板坂は同書の中で「貝原益軒の役割」の項目を設けて次のようにも述べている。

やはり、近世紀行文文学史について述べる時、貝原益軒の存在を欠かすわけにはいかな
いだろう。

彼の紀行文はすべて、京の書肆柳枝軒、すなわち茨木屋太左衛門から出版されている。これらの板行された諸本は、いずれも携帯に便利な小型本で、文字は大きく、地名ごとに改行して、実用的な案内記としての体裁をとる。事実またそのように使用されたのであろう。天保九年（一八三八）、安田相郎『大和巡日記』（『日本庶民生活史料集成』第二卷所収、広江清氏解題）は、益軒の『和州巡覧記』（元禄九年・一六九六刊）を、まさに片手に参照しながらそのコース通りに旅をし、また案内人はそんな彼に、他にも「貝原

記」を持参してくる人がいると告げている。大田南畝や本居宣長もまた自作の紀行中に益軒の書を多く引用した（板坂 c 9-10）。

『和州巡覧記』は「大和地方の名所古跡を紹介している」（今野 149）紀行文である。『和州巡覧記』については1692年、1696年とする説があるが、引用中の文章を除き、本論文では1696年で統一した。1692年は奈良（大和）に訪れた文章が『壬申紀行』内にあり、これを『和州巡覧記』と混同したものと思われる。

では益軒の紀行文の特徴とは何であろうか。これについても板坂は次のように述べている。

…益軒の案内記類は、それを再び都市以外の、たとえば木曾路や日光道中に広げることによって、中世以前の紀行文とは異なる新しい視点、すなわち、風景の一部としての、あるいは物語のような異境としての郡の風物ではなく、人間が生きる場所としての魅力を最大のものとする大都会と同様、人間が生き、かたちづくるものとしての地方の生活、産業の風土、生活形態を見える視点を確立したのであった（板坂 c 10）。

また、板坂は別のものでも次のように述べている。

…紀行の制作においても彼は、従来の枠をこわすのに、新しい文学をめざすのではなく、あくまでも実用に役立つものを人々のために書くという姿勢をとりつづけることで、まったく新しいかたちの紀行を生み出すことに成功した（板坂 d 103-104）。

同様に、他の研究者の吉田光邦『江戸の科学者』（2021）でも次のような指摘がある。

益軒はまたすぐれた旅行家でもあった。そのたびごとに彼はすぐれた旅行記を書き、その多くは晩年に出版された。彼の旅行記は中世のそれらのように文学ではなかった。各地の自然の美しさを記しつつ、物産や人情について客観的に描写していったのである（吉田 35）。

益軒は藩命により『筑前国続風土記』全30巻を1688年から編集をはじめ、その自序は1709年に書かれていることから、20年以上をかけてまとめているが、益軒の執筆姿勢は事実に基づいた記録を重視することに主眼が置かれていたように思われる。

謝心範「『養生訓』の分析研究—漢籍の影響」（2015）により益軒が著した『養生訓』に記載されている多くの内容が、漢籍文献からの影響が多いことがすでに証明されている。これは「養生」という全体像を明らかにしたものである。漢籍を中心にした本文研究である。筆者が注目していることは漢籍文献に頼らず、自らの実地調査や旅によって記述した可能性が高い内容の部分である。漢籍、すなわち、中国の文献または中国語で記載された内容の文献

によらないものとして、九州の杖立温泉、別府温泉と有馬温泉が漢籍に登場し、さらに温泉の効用について記載されている可能性はほとんどないからである。中国における温泉文化が日本とは異なっている背景もあり、温泉の記述が漢籍から影響を受けている可能性は極めて低いのではないかと考えている。

中国の温泉文化については干航「中国の温泉文化について」(『温泉地域研究』第6号、日本温泉地域学会、2006)の「中国有名温泉地の概略」により温泉が紹介されている。益軒は『養生訓』の中ではっきりと漢籍を参考している場合にはその中で記述しているが、温泉に関わる箇所においてはそれがない。干航によれば、中国における温泉の最初の記述が紀元前5000年に書かれた『黄帝内経』(靈枢篇)に「水泉」の記述が見られる(干 51)。「水泉」とあるが、低い温度の温泉もあることから、広い意味でこれを温泉の記述として一般的にはとらえられているようだ。さらに干航は『水経注』、『温泉頌』、『温泉碑文』(墓碑上の文章)、『温泉詩』、『温泉賦』、『本草綱目』に温泉の記述が見られるという(干 51)。

益軒が『養生訓』等で温泉を取り上げているのは、温泉が一般庶民にとって身近なものであり、湯治という習慣が一般化したことにある。益軒が温泉以外のところで『黄帝内経』を参考にしていることは謝心範等の研究により明らかにされている。

益軒は福岡藩の役人であり、江戸や京都を訪問しているが、少なくとも有馬温泉(有馬の温泉)には1661年(32歳)・1711年(82歳)、杖植(立)温泉には1679年(50歳)、別府温泉には1694年(65歳)に訪れ、その後、これらの温泉又は温泉地のことを著作物に著しているが、刊本として公開されていないものもある。現在出版されている『益軒全集』には「杖植紀行」(「杖立紀行」)は所収されていない。「杖植紀行」は益軒最初の紀行文となるため(井上 111)、益軒の紀行文に対する初期の姿勢がわかるという。その姿勢は概ね後期のものと変わっていないようだ⁽³⁾。なお、下記に示す年表では参考にした出典毎で記載したため、同年のものについても違った説明をそのまま並列して示した。

貝原益軒の温泉訪問とおもな著作物の年表(楊 b 109-110)

元号(西暦)等	年齢	事項	貝原益軒の著作
寛文元(1661)	32	京都に行く。農学者宮崎安貞らと交流する。(福岡市博物館・特別展示解説)	
寛文元(1661)	32	春二月林春齋の易啓蒙を講ずるを聞く。三月藩の宰臣立花勘左衛門重種に従うて西帰し、有馬の温泉に往いて留ること二十一日、勘左衛門の為に小	

		学を講ずること日に三回、講を卒りて直に帰京、安楽小路に居る。小学句読、孝経、大学章句及び論語集註の上を講ずること日に一回、此歳小学を反覆して講ずること三回に及ぶ。(益軒会編 a 12)	
延宝 7 (1679)	50	肥後国の杖立温泉へ行く。(福岡市博物館・特別展示解説)	『杖立紀行』、『伊野大神宮縁起』、『初学詩法』、『増福院祭田記』
延宝 7 (1679)	50	主な夕遊観地:杖立温泉、英彦山(溝口 371)	『杖立温泉』
延宝 7 (1679)	50	春三月往いて肥後の杖植温泉に浴すること凡その日、途次英彦山に上る。帰って杖植紀行を作る。冬十二月八日、自ら五十の壽を賀し、家に客を饗す。此歳伊野大神宮縁起を作る。真字仮字各一篇あり。初学詩法成る。自ら詩を賦するを好まざるも、國人詩を作るを喜んで、而かも法を知らざるを嘆じ、諸家の詩話を纂輯して之を編む。増福院祭田記また成る。(益軒会編 a 21)	
天和 2 (1682)	53		『頤生輯要』
元禄 5 (1692)	63	初めて湯島聖堂へ行き儒学者・林鳳岡と会う。京都で公家と交流。(福岡市博物館・特別展示解説)	『続和漢名数』、『壬申紀行』、『背振山記』

元禄 5 (1692)	63	主な夕遊観地:書写山、奈良、伊勢、東海道、身延山、江の島、鎌倉(溝口 371)	『壬申紀行』
元禄 7 (1694)	65	別府温泉へ行く。徳川光圀よりの依頼で『黒田記略』を編さんする。(福岡市博物館・特別展示解説)	『花譜』、『熊野路記』、『豊国紀行』
元禄 9(1696)	67	主な夕遊観地:京、奈良、吉野(溝口 371)	『和州巡覧記』
宝永 5 (1708)	79	近郊を旅行する。(福岡市博物館・特別展示解説)	『大和統訓』
宝永 6 (1709)	80	80歳の長寿を祝う。(福岡市博物館・特別展示解説)	『岐蘇路記』、『大和本草』、『篤信一世用財記』
正徳元(1711)	82	門人らが集まり80歳の長寿を祝う。(福岡市博物館・特別展示解説)	『岡湊神社縁起』、『有馬名所記』、『五常訓』、『家道訓』
正徳元(1711)	82	主な夕遊観地:有馬温泉(溝口 371)	『有馬山温泉記』
正徳 3(1713)	84	東軒夫人が没する(62才)。(福岡市博物館・特別展示解説)	『養生訓』、『諸州巡覧記』、『日光名勝記』

(筆者作成)

ここで、上記の年表の流れから見ると、やはり益軒はいろいろな場所を遊観し、自分自身の体験で、温泉に関する内容を書いた可能性が高いのではないかと推測される。益軒が福岡藩の役人であったことから、当初は九州の温泉に着目していたことは当然と言ってよいだろう。しかし、杖立温泉は「諸国温泉功能鑑」(1851)には掲載されていない⁽⁴⁾。「諸国温泉功能鑑」の発表年ははっきりわかっていないが、最初のものには1812年～1817年ではないと言われて⁽⁵⁾いる。類似のものを見ても、杖立温泉は掲載されていないようだ。なお、「杖立」の表記については「杖植」が混在している。当然のことながら、草津温泉と有馬温泉は同様に東西の大関にランキングされているのだ。益軒のフィールドワークが西日本を中心に展開されたことは、福岡藩の役人ということからやむを得ない事情であったことは推測できる範囲であろう。福岡から京都、そして江戸への往復が多かった。

明治以降であるが、益軒のように旅により学問の基礎を築き上げた学者に折口信夫(1887 - 1953)がいる。

折口信夫のユニークな学問の基礎を形作ったのは、その生涯にかぞえきれぬほど繰り返された旅であった（西村 117）。

益軒が旅の記録をできるだけ正確に残そうとした目的とは異なり、折口がまつり（祭り）について書いた最初の論文「ほうとす話」（1927）（折口 416-440）について西村享編『折口信夫事典』（1988）では次のように解説している。

地方に残る古風な生活感覚をただ外部から客観的に観察するだけでなく、それを自らの感覚のうちにとりこむことによって、文献の知識を生きた人間の生活として立体的に再構成する「実感」を得ようとする。それが折口の旅の真の目的であった（西村 117）。

益軒と折口は同じように旅をしてきたが、益軒には「楽」が優先し、折口は学問的な目的のあるフィールドワークであった。

第1項 大和（和州）

益軒は大和については『和州巡覧記』（1696）以外でも記録している。例えば、『壬申紀行』（1692）では「奈良遊覧」の項目があり、法隆寺、斑鳩のさと、唐招提寺、興福寺、東大寺など、彼が歩いた旅程とともに記録している（貝原 c 17-18）。なお、益軒会編『益軒全集』（巻之一）（1911）の「凡例」には次のようにある。

一 和州巡覧記は一名大和めぐりと云ふ。元禄五年六十六歳の時に成る。大和の名所古蹟の案内記なり（益軒会編 b 1）。

またここでは特に取り上げないが、「西北紀行」（1713）、「南遊紀行」（1713）についても次のようにある。

一 西北紀行、南遊紀行は諸州巡覧記と總稱し、一名諸州めぐりと云ふ。南遊紀行は曾て京都より河内大和を経て紀伊を漫遊したる時の紀行にして、西北紀行は京都より近江越前丹波丹後等の諸國を漫遊したる時の紀行なり。正徳三年八十四歳の時、此種の紀行を合せて一書と爲し、諸州巡覧記と名づく（益軒会編 b 1）。

益軒の大和（奈良）に関する記述や『和州巡覧記』が後年の人にどのように捉えられていたのかの一例として安田相郎『大和巡日記』（1838）を挙げてみたい。宮本がすでに指摘していたように（宮本 3）、実際に『大和巡日記』には「篤信か記に見へたり」（安田／廣江 445）、

「篤信が書たる中の」（安田／廣江 446）、「是より篤信か記には」（安田／廣江 446）、「貝原記に有り」（安田／廣江 453）、「貝原記に見へたれば」（安田／廣江 453）、「貝原記には」（安田／廣江 454）、「貝原記に」（安田／廣江 454、459）などの表現が随所に見られる。篤信とは貝原益軒のことである。特に注目しておきたい記述としては以下の2か所がある。

此處を初貝原篤信か大和巡の記にもとづきて、名所古跡を拾ふ也（安田／廣江 445）。

たまへ關東よりは貝原記など所持して來る人、西國にて貴君計くはしく御尋の方は、初めて手引よし申す（安田／廣江 447）

前者については「大和巡の記」について補註で「貝原篤信の「和州巡覽記」のことであろう」（安田／廣江 471）と指摘している通りである。さらに佐村八郎『国書解題』から引用している。ここでは増訂第二版（1904）より引用する。

京を出でて大和を巡歴せる記にして、吉野の事を最も詳しくせり。一名を『大和廻』といふ。題下に記して、「吉野へ往來の路を記す。玉水より藪の渡を越え、奈良の西を見、西の京より先づ奈良へ行き、それより郡山へ出で、吉野へ行き、帰りにはまた奈良を過ぎ、笠置へ上り京に帰る道すぢを記す」云々といへり。（中略）巻尾に『元禄九年上元日貝原篤信記』とあり（佐村 2084-2085）。

佐村八郎『国書解題』（1904）は明治時代の文献であるが、「吉野の事を最も詳しくせり」と評価していることは注目してよいだろう。

第2項 有馬（温泉）

益軒が有馬温泉を訪れた案内記は『有馬山温泉記』（1711）、『有馬山温泉記追加』がある。『有馬山温泉記』は原名を『有馬名所記』（益軒会編 b 2）ともいう。なお、『有馬湯山記』などといった名前もある。これは開板の表紙、中表紙、序文などで表記が異なっているため、別名となっている。

なお、益軒会編『益軒全集』（巻之一）（1911）の「凡例」には次のようにある。

- 一 有馬山温泉記は原名を有馬名所記といふ。正徳三年八十二歳の時に成る。有馬温泉及び往反の道の案内記なり。
- 一 有馬山温泉記追加は、前書の補遺にして且つ別に温泉入浴者の心得を説く。成るの年月を缺くも、蓋し略ぼば時を同うしたる作なり（益軒会編 b 2）。

『有馬山温泉記』の内容は次の通りである。

- 一 今日より有馬湯山へ行道を記す
- 一 病症により湯治宜悪の事
- 一 汲湯の事
- 一 湯山の事記
- 一 入湯の法
- 一 温泉に硫黄のある事
- 一 諸國の温泉
- 一 湯山の鎮守
- 一 有馬の山川名所古跡
- 一 有馬の土産
- 一 伏見より神崎迄の船路
- 一 湯山より尼崎へ出大坂へ行道
- 一 湯山より伊丹をへて大坂へ出道
- 一 湯山にて詩歌述作古人名（益軒会編 b 268）。

『有馬山温泉記』の冒頭は次のようになっている。

京都より攝津國有馬群湯山へ行道を記す
○東寺、是より山崎へ三里、凡一里は三十六町也。或人云、是より有馬への道は、四十八町を一里とす（貝原 h 268）。

案内記として京都から有馬までの道程を客観的に記しているものである。

○大谷川、
○温泉寺坂、のぼりくだる。
○こぶ坂、上りくだる。
○榎が池、坂あり。のぼりくだる。坂の上より津の國北郡、丹波の山よくみゆる。ひろくみゆる。ひろくみゆる。むかし此坂の下谷に、榎が池とて、池ありしといふ。今はなし（貝原 h 268）。

歴史的背景などにも適宜触れている。

○下植野村、勝龍寺の城あと左にあり。信長公の時、岩成主税助城なり。信長これをせめ落し給ふ。其後細川兵部大輔藤孝これを守らる。城の境内はなはだせばし。堀も今

にあり。後に明智日向守光秀、山崎合戦に敗北して、此城に一夜籠る。夜中に城を落
て山科ににげ行て。里人に殺さる（益軒 h 269）。

京都から有馬山までは戦国時代の明智光秀(1516/1528?-1582)が織田信長(1534-1582)を討
った本能寺の変（1582）、続く山崎の合戦（1582）の舞台にもなっていることから、こうし
た背景をも捉えている。

「伏見より攝州神崎までの船路」の冒頭は次の通りである。

- 京都より有馬に行に、伏見より神崎まで舟路をゆき、神崎より上り、陸路を通り、伊
丹小濱を過て、有馬に入もよし。
- 伏見、京橋より淀小橋へ壹里、京橋の下の水は宇治川のわかれにて、豊後橋より来る。
- 宇治川、左より流出て、伏見の川水と一にある。近江の湖の末なり（益軒 h 284）。

旅行案内として陸路だけでなく、舟路も案内し、近江の湖とは琵琶湖のことだが、伏見、京
橋、宇治川など、ポイントになる地名なども随所に入れて記している。

第4節 貝原益軒が生きた時代

本草学者であり、儒学者である益軒の生きた時代は江戸幕府が安定し始めた時期とも言え
る。松田道雄「貝原益軒の儒学」（1969）中の「益軒の生涯」の冒頭で次のように紹介してい
る。

彼は寛永七年（一六三〇）十一月十四日に福岡城内の東邸に生まれている。徳川家光が
征夷大將軍に任ぜられてから八年後である。この年から長崎に来る外国船に洋書をもた
らすことが禁じられた（松田 10）

益軒が生きた時代とは、益軒が生まれたのが1630年、その後の10年間は島原天草一揆
（1637）、ポルトガル船の来航を禁止したことでいわゆる鎖国（1639）が完成した時期であ
る。鎖国は浦賀へのペリー来航、その後1854年の日米和親条約締結までの期間とされる。益
軒の生きた時代はまさにこの鎖国の時代であると言ってよいだろう。このため当時の出版物
等は漢籍によるものを中心に、和文交じりのもとなる。

西暦	貝原益軒関係	西暦	事項（当時の社会情勢及び出版物等）
		1623	徳川家光、征夷大將軍に任ぜられる
1630	貝原益軒生まれる		
		1633	福岡藩における栗山大膳事件（黒田騒動）

		1635	武家諸法度を改訂し、参勤交代の義務付け
		1637	島原・天草一揆
		1639	ポルトガル船来校禁止（鎖国完成）
		1643	『料理物語』
		1649	『慶安の御触書』
1650～1656 浪人時代			
		1657	明暦の大火
1671	『黒田家譜』編纂の命を受ける		
		1672	平子政長『有馬私雨』
1678	『黒田家譜』を藩主・黒田光之に献上		
1679	『杖立紀行』		
		1681	松尾芭蕉「侘テすめ月侘齋がなら茶哥」
1682	『頤生輯要』		
		1685	『有馬山温泉小鑑』
1692	『壬申紀行』		
1694	『豊国紀行』		
1696	『和州巡覧記』		
		1697	人見必大『本朝食鑑』
		1697	宮崎安貞『農業全書』
1700	『日本歳時記』		
		1700頃	河内屋可正『河内屋可正旧記』
		1702	松尾芭蕉『奥の細道』
1709	『大和本草』		
1711	『有馬山温泉記』		
1713	『養生訓』		
1714	『慎思録』		
1714	『大疑録』		
1714	貝原益軒没する		
		1715	新井白石『西洋紀聞』
1716	『文訓』		
		1720	徳川吉宗、漢訳洋書の輸入制限の緩和
		1738	五流斎布門『有馬の日記』
		1749	原双桂（原雙）『温泉考』（『温泉小言』）

		1763	平賀源内『物類品隲』
		1773	冷月庵谷水『料理伊呂波庖丁』
		1774	杉田玄白『解体新書』
		1781	大槻玄沢「芝蘭堂」を開校（蘭学塾の始まり）
		1785	器土堂『万宝料理秘密箱』
		1801	杉田玄白『養生七不可』
		1802	十辺舎一九『東海道中膝栗毛』
		1802	杉野権兵衛『名飯部類』
		1803	小野蘭山『本草綱目啓蒙』（～1805）
		1805	式亭三馬『浮世風呂』
		1808	フェートン号事件
		1810	八隅蘆庵『旅行用心集』
		1811	幕府天文方の外局に蛮書和解御用が設置される
		1815	杉田玄白『蘭学事始』
		1816	原念斎『先哲叢談』
		1827	大根土成・福智白瑛『滑稽有馬紀行』
		1828	シーボルト事件

（筆者作成）

本草学者であり、儒学者である益軒の生きた時代は江戸幕府が安定し始めた時期であり、それは「平和と秩序」（松田 19）の時代であったということだ。

本草学、医学という面でみれば杉田玄白・前野良沢『解体新書』（1774）、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1866）が活躍した蘭方医学が注目される以前の漢方医学の時代である。その後、1808年にフェートン号事件が起きる。佐々木隆『国際文化交流の行方』（2017）の中で次のように位置付けている。

幕府に英語（イギリス）を意識させたのが、1808年のフェートン号(Phaeton)事件である。これはオランダ船を装ってイギリス軍艦フェートン号が長崎に入港したものである。この事件は、すでにヨーロッパでのオランダの国力が低下していたこと、長崎の湾内警護が太平に慣れて護衛兵を減らしていたために十分な対応ができなかったことも理由のひとつに挙げられよう（佐々木 a 428）。

フェートン号事件を契機に幕府がイギリスを意識するようになり、その結果、蘭学通詞等に英語を学習させる契機となった。その後、1814年には本木正栄（1767-1822）により日本で

最初の英和辞典、『諳厄利亜語林大成』が刊行された。この辞典は蘭語、英語、日本語が併記された画期的なものだ。

益軒の生きた時代は蘭方以前、英語以前の時代である。こうした時代の中、益軒は当時漢籍の最高峰である李時珍『本草綱目』(1596)に注目しながらも、これに圧倒されることなく、日本に必要なものを忘れることなく取り上げたのは、益軒自身が日本における「民生日用」にこだわった結果である。